小山内仁之介はここ数日機嫌が良い。表立った変化はそれほどないものの、多少口数が増えた。良く喋る人間が現れたから釣られているのかもしれない。
音は軽いくせに妙な重圧を持つ足取りで、仁之介は廊下を進む。経年が生み出した濃厚な気配は特に隠れていない。そのせいなのか、戸の向こうでいささか慌てた孫娘の声が聞こえてきた。
「……ぎわっ、もう離しなさいって……っ」
「んー」
対する声は至極のんびり。少しばかり面白がっているような風も感じられる。意思の一致は見えていないようだ。仁之介はどちらの味方もしない。当初の予定通り、迷いもなく戸を開ける。
部屋の中では孫娘とその連れがベタベタしていた。
「汀、将棋指すぞ」
一片の動揺も生まないまま仁之介は言う。彼の上機嫌の原因である汀は、こちらも上機嫌に笑って、柔らかな身体を抱きこんだまま目線をこちらに向けてきた。抱きこまれている方は汀の膝の上で固まっている。わずかに髪が乱れているのは脱出しようと暴れたせいか。
「すいません、あと五分だけ待ってもらえます？」
「ま、かまわねえよ」
「だって、オサ」
「なんで私に振るのよ！」
「だからあと五分」
むきーと怒鳴る梢子の剣幕を涼しい顔でやり過ごし、汀は頬にかかった彼女の髪を優しく払う。
仁之介は仏頂面で（彼の常態である）それを一瞥する。
「暴れすぎてバテるなよ」
返した身体の後ろに、賑やかしい少女たちの声がぶつかってきた。
夏なのに元気なことだ。少女だから元気なものだ。
祖父に見られるという失態を犯した梢子は、彼の姿が見えなくなってから苛立ち紛れに汀の両耳を思い切り引っ張った。「痛い痛い、オサ痛いギブギブ」耳という鍛えられていない箇所を攻撃されたせいか、汀があっさり降参する。
「も、もう、馬鹿！　あなた、おじいちゃんが来るの気づいていたでしょう！」
「いやー、さすが仁之介さんね。ちょっとからかってやろうと思ってたんだけど、全然効いてないわね、あれは」
「私をダシにしないで！」
「まーまー。もう済んだことだし」

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

軽くいなそうとする汀である。梢子はまだまだ治まらないが、頬に触れていた手が今は額を押さえてきているので退くことも叶わない。人体には可動部が明確に存在していて、そこを固定されてしまえば動けないのだ。座っている人間の額を指で軽く押さえると立ち上がるための動作がすべて不可能になる。有名なので梢子も知っている技だったが、まさかこんな目的のために使われる日が来るとは、予想だにしていなかった。

梢子の動きを封じたまま、汀が首筋にじゃれついてくる。短い髪に撫でられてくすぐったい。額からすべり降りた指先がぼんのくぼをなぞってくる。触れられたそこから弱電流がつたって、小さく吐息が洩れた。

涼やかな彼女の表情は見えない。ただ太陽の色をした髪だけが視界に入る。

眼下から降る日差しが強くて梢子は目を閉じた。

「……五分、経ったんじゃないの？」

「まだ二分」

本当だろうか。どちらの手首にも時計はない。彼女の位置からは時刻を確認する手段はないはずだ。どうせ適当なことを言っているのだろう。遅れて祖父に小言のひとつももらえば良い。そんなことでこちらの気は晴れないけれど。

手のひらが夏らしい薄布をくぐってくる。「ちょっ、汀っ」さすがに焦ってその手を掴んだ。止めたせいか最初からそのつもりだったのか、彼女の手のひらは脇腹のあたりで停止する。触れ合う部分が熱を帯びる。夢見るような手つきで己のシルエットを辿られて、知らず知らず、頬が紅潮した。

「ん？」焦りの意味をつかみかねたか、顔を上げた汀の双眸はどことなく無邪気だったが、次の瞬間には悪戯に細められていた。

「ああ、別にそんなつもりじゃないから。さすがに昼間から押し倒したりしないわよ」

「夜でもしないで」

いつぞやの夜を思い出してげんなりする。自分たちの関係性が微妙に、そして奇妙に変化したあの日の夜、なにをとち狂ったか彼女はこちらのベッドにもぐりこんできたのである。

もちろん抵抗した。全力で怪力乱神に立ち向かった。たとえ深淵に封じられた神を相手にしても、ここまでできないのではないかというほどの奮闘振りだった。そしてからくも勝利した。理不尽や不条理に屈するほどか弱くはない小山内梢子だ。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

「どうしよっかなー」鼻歌にも似た調子で答えられて、梢子はますますげんなりした。この猫、まったくこちらの意見を取り入れるつもりがない。
彼女に触れられること、そして彼女に触れること、それ自体は嫌ではない。
だからこその現状だ。彼女の指や手のひらや頬や唇が己の肌に触れる瞬間に嫌悪は訪れない。
けれど、二人の間に恋や愛はない。
指や手のひらや頬や唇が触れてきても、脈打つ鼓動のテンポはほぼずれない。刺激による反応は起こっても、それ以上の心的な何かはない。
だからこその、現状だ。
「固いわねー。身体はこんな柔らかいくせに」
するんと脇腹をくすぐられる。思わず色のついた声が洩れ出てしまって、耳ざとく聞きつけた汀が面白そうに笑った。
「こらっ、とっくに五分経ってるでしょう。おじいちゃん待ってるわよ」
照れと怒りがない交ぜになった忠告に、彼女は「はいはい」と軽薄なうなずきを返す。
「じゃ、仁之介さんのお相手してきましょうか」
最後にシャツの襟ぐりを押し下げて、鎖骨の中央に口づけてくる。
彼女は触れる箇所がいつもクリティカルで、梢子は困る。
「じゃーねオサ、また後で」
「……充分触ったじゃないの」
「全然足りないわよ。なにせこっちは一年も遠回りしちゃったし、こうなっちゃったら欲深くもなるってものでしょ？　『隴を得て蜀を望む』なんて言葉もあるし、人の欲って古来から際限がないものなんだから」
理由をつけて、自由を見つけて、義勇を踏みつけて。
そうして作った人でなしと害悪の世界は、外界への道を断つ。この世界に留まっている限り欲求は止め処ない。
梢子は溜め息をついた。
溜め息を吐き出した直後の表情を変えないまま、低い位置にある汀の髪を両手でかき回す。彼女の方が背は高いので、いつも少し見上げてばかりだから、今の視界はなんだか新鮮だ。物珍しい光景の中で汀は嬉しそうにしている。
自己評価どおりに猫のようである。こちらの都合などお構いなしに甘えて、願いが叶えば一人で勝手に恍惚に入る。
いとしいとは思わないが、可愛らしいとは思っているような気がするので、己もたいがい始末が悪い。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

ようやく解放してくれた汀は、しなやかな肢体を揺揺と伸ばして仁之介の待つ居間へ向かった。
一人残された梢子は馴れ合いの際に触れられた部位を押さえながら、視軸を床に移す。
「……私、なにしてるのかしら」
うっかり今更なことを呟く梢子だった。

居間に入った瞬間、待っていた仁之介から差し向けられたのは、鋭い視線と「遅え」の一言。汀は礼を失しない程度に頭を下げる。
彼の視線と言葉は、約束破りを咎めただけで、自分を放っていたことを不愉快に感じているわけではない。そう理解できる程度には交流が深まっていたので、あとはもう彼の対面に腰を下ろして駒を並べ始めた。
仁之介は仁之介で、汀が簡単に約束や前言を覆すと判っているようだ。
良く言えばクレバー、悪く言えばだらしないその性分は、基本、年配者のお気に召さないケースが多いのだが、彼はそこまでうるさくないらしい。

もしくは、汀の性分には理由があると勘付いているか、守るべきものは守っていると見抜いているか、だろうか。
そうだとしたら大したものだ。長く生きることと優れることはイコールではないが、彼は良い道を辿ってきたのだと思う。
梢子はよく自分は運が悪いと言っているけれど、彼のもとに生まれ出でたそれこそが最初にして最大の幸運だ。
汀に出逢ってしまったという、おそらくは最後にして最小の不運など、ささやかすぎて霞んでしまう。
「では、よろしくお願いします」
「おう」
しばらくパチパチと駒を将棋盤に打ち付ける音が響いた。
二人とも長考はない。
手遊びのような気軽さで進む勝負の中で、仁之介が盤を見据えたまま呟いた。
「夏ってのはいいな」
「へえ？　あたしは南の生まれなんで慣れてますけど、仁之介さんはそろそろ身体に堪えてくる頃じゃないですか？春とか秋のほうが過ごしやすいと思いますけど」
「俺じゃねえ、お前らにいいって言ってんだ。
春の夢は一瞬で覚める、秋は秋風が吹くだろうが」

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

汀は彼の言葉が先ほどの自分たちに対する揶揄だと気づく。やはり、孫娘がどこの馬の骨とも知れぬ輩とあんなことをしていては（個人的には見られて困るレベルではなかったのだが）、祖父としては面白くないのか。
いや、裏を読めば認めていると取れなくもない。
終わりが来る春や秋ではなく、夏にいろと言っているのなら、そう解釈しても間違いではない。
「けど夏は、馬鹿が風邪引いちゃいますからね」
「ああ、そういう馬鹿はどうしようもねえな。馬鹿につける薬はねえってのは本当だ」
人のことは言えないが、目の前にいる気難しい老爺は口が悪い。
今ごろ風邪っぴきの彼女はくしゃみのひとつもしているかもしれない。
秋風が吹くよりは、夏風邪を引くほうが随分良いだろうけれど。
仁之介がパチリと駒を打った。
「夏はお前らみたいな奴らの季節だな。確かに、俺みたいなおいぼれには堪える」
「朱夏には二十年くらい早いんですけどね。
おっかしいなー、花も恥らう十代なのに」
「春の色めきをすっ飛ばしたからだろう」
的確に指摘されて、汀は思わず苦笑した。
「ところで、そこに打つとあと二十四手で詰みですよ」
「何言ってやがる、そりゃお前が十七手目を読み間違えてんだ」

夏である。大会から一週間強というこの時期は、高校生のオアシス、夏休み真っ盛りである。
なのに梢子はほぼ毎日学校へ通っている。部活動で指導するためだ。
そして汀も五割くらいの確率でくっついて来ていた。
「おおっ、オサ先輩、ミギーさん、おはようございます！」
朝から元気な百子の声。小さな身体から放出されるエネルギィは絶大だった。
放出量と吸収量が同程度だから大きくなれないのだ、というのは梢子の推測だったが、汀も異論はない。
まだ開始時間までには余裕があるので、道場には百子と保美の二人だけだった。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

百子はすでに胴着をまとっていて、ジャージ姿の保美と一緒に開始前の準備をしていた。
その手を止めると、汀へ小走りに駆け寄ってハイタッチ。といいつつ、汀のほうは両手が胸までしか上がっていないが。
「おはよー百ちー。やすみんも」
「あ……おはようございます」
地雷は複雑そうな笑顔で応える。
「百子。道場で走らないの」
「おおっと、すみませんでしたオサ先輩」
百子が梢子に対して殊勝に頭を下げた。入部当初は反発ばかりされて大変だったと梢子が話してくれたが、一年を経た今、その傾向は見えない。潔さに惹かれたのだろう。
もっとも、惹かれるばかりではないだろうけれど。愛憎と言ってしまうのは言葉が強すぎるものの、プラスとマイナスの感情はたやすく共存する。
それでもあんなふうに頭を垂れることができるのだから、彼女はずいぶんと人ができていると言えよう。
梢子が着替えるために更衣室へ足を向けたので、汀も特段意識するでもなく後ろをついていった。
なにやら二方向からじっとりねめつけられた。
「ん？」
「……あなた、どうしていつもついてくるの？」
「や、なんとなく」
じっとりした目線をくれたまま、梢子が手のひらを汀に突き出してきた。
これはどう見ても、「ステイ」のジェスチャである。
「待ってなさい」
「うんうんなるほど、それって命令よね。犬をしつける時によくやるわよね。でも残念ながらミギーさんは猫なの」
人の言うことを聞かない、我を通すしかないのが猫だ。
というわけで、とずんずん近づいていく汀の額を、梢子がぺしんと叩いた。
「いいから百子と遊んでなさいよ。あなたたち気が合うんでしょう？」
「そうねー。百ちーとは気が合うわ」
言外に二つくらい意味が込められていた。梢子はどちらも気づかなかったようだ。
百子は……一つは気づいたか。
気の合わない相手がここにいる、という意味には気づいている。表情がそれを物語っていた。怒ったような、不満なような表情だった。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

もう一つの意味、身体が合う存在については気づいていない。
後方から届いていた視線がその粘度を増した。きっと振り返りでもすれば、絡みつくそれはたやすく振りほどけるだろうけれど、その後が少々恐い。
さて、どうしようか。
「じゃ、みんなで入るということで」
「……何を言っているの？」
「駄目？　ナイス折衷案だと思ったんだけど」
百子と保美はすでに着替えているし、汀はただの見学なので着替えをする必要はない。
それは当然判っているので「ナイス折衷案」は嘘だったが、まっすぐな彼女だからひょっとしたら騙されてくれないかなと期待していたのだ。
梢子は夏風邪こそ引いても、そこまで馬鹿ではなかったようで、呆れた表情を浮かべながら左眉を器用に上げた。
「あなたが大人しく待っていれば済む話じゃないの」
正論だった。
「まーまーミギーさん、ここはこの秋田百子の顔に免じて、勘弁してもらえませんかね」
「なんで私が汀に勘弁されなきゃいけないの」
「まーまーオサ先輩」
「ちょっとごめんなさいよ」とばかりに割って入ってきた百子が、梢子と汀の双方へ交互に身体を向けて、「二人ともひとまず落ち着いて」と両手のひらを見せてくる。
中間管理職を連想させる仕草だった。彼女は将来、社会人になったら苦労するのではないだろうか。
「もうすぐみんなも来ますし、オサ先輩が着替えてくれないと、こっちも困りますんで、ここはミギーさん、引いちゃあもらえませんか」
「んー、百ちーにそこまで言われちゃしかたないか。良い後輩持ったわね、オサ」
「良い後輩というのは否定しないけれど、そんなことで百子を評価しないで」
「じゃ、あたしは百ちーと遊んでるから、やすみん、オサの着替え手伝ってあげて」
「え、え!?」
いきなり水を向けられた保美が戸惑いがちに声を上げて、止めて欲しいような、求めて欲しいような目で梢子を見やった。
見つめられた方はどちらの意図も汲み取らず、一本気な表情で両手を腰に当てて応じる。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

「いちいち汀の冗談に付き合っていたら身がもたないわよ。子どもじゃないんだし、別に手伝ってもらわなくても良いから」
「あ、そ、そうですよね……」
なんとなくちょっと残念そうな保美だった。
「では、ざわっちもこっちの仲間です。
んっふっふ、今日はオサ先輩がハブですよ」
所在なげだった保美の腕を取って引っ張る百子が意地悪く笑う。
「百ちゃん、別に仲間とか……」保美が気弱にたしなめたが、それくらいで反省するはずもない秋田百子である。
「馬鹿言ってないの」
嘆息混じりに言って、梢子が更衣室へ消える。
残された三人はなんとなく車座になって歓談の雰囲気を持ち始めた。
そこはかとなく危険性を孕んだ組み合わせだ。
どこかでなにかが間違えば、待っているのは波瀾だ。
行儀悪くあぐらをかいた汀が、自身の手を顎に当てて低く唸る。
「確かにオサも、それなりの毒を持ってるわけだから、ハブってのもあながち間違いじゃないわよね」
「うっ、ミギーさんその話題はあたし的にタブーですよ。いいえ諦めません、あたしはまだ諦めてませんけど！」
「百ちゃん、さすがにそろそろ……」
ごにょ、と語尾を濁す保美。最後まで言い切らなかったのは友愛の情だったのだろうか。
「ざわっちたまにひどい……」しっかり意図を汲んだ百子が泣き真似をした。
そんな他愛もないやり取りが続き、三人の間を流れる空気は存外なごやかだった。考えてみれば地雷を踏める人間がいないのだから、当然だったかもしれない。
そうしている間に他の部員も集まり始めて、梢子も道場へ戻ってきた。汀は梢子に促されて隅へ追いやられる。礼より義より実を重んじる汀は正座をしない。軽く膝を立てた姿勢で壁に寄りかかっている。初めのうちは梢子が注意していたが、いくら言っても聞かないので三度目くらいで諦めた。
ただの見学とはいっても、汀は全国大会出場者であり、決勝戦を梢子と争った存在である。キャリアの短さを微塵も感じさせず、その場で目についた選手にアドバイスをしていく。ある意味、敵のような立場であるはずだが、部員は各々、素直に汀の助言を受け入れた。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

素直でよろしい、と思うが、同時に少し物足りない。
道場内に裂帛の気合が響き渡る。みんなここを一歩出たら恋の話にでも盛り上がりそうな女子高生だというのに、可愛げはまったくない。まあ甲高い声で可愛らしく気合を発しても一本は取れないから当たり前だが。
唐突に声が止む。原因は音だった。ひどく人を不安にさせる衝撃音がとどろいて、それに驚いたせいで全員が声と動きを止めた。
強制的な静寂の中、汀は流れるように立ち上がって音の主へ向かう。
「オサ、平気？」
「うん。ちょっとすりむいただけ」
「す、すみません先輩」
「大丈夫。気にしないで」
打ち込みの勢いが強すぎてぶつかってきた後輩を受け止めきれず、もろとも倒れこんでしまった梢子が、汀の手を借りて立ち上がった。頭部を守るために犠牲にした左腕が赤く傷ついている。肘の下あたりから手首へ向けて中ほどまでか。擦れて範囲が広がったせいか、見た目がやけに痛々しい。
傷の具合を確かめた汀が、わざとらしく顔をしかめた。
「ありゃりゃ、これは手当てした方がいいわね。やすみーん、救急箱ってどこ？」
「え、あの、向こうの用具室に……」
「ありがと。ほらオサ」
「いや大丈夫自分でできるから」
梢子は早口に言い、連れて行こうとする汀を拒む。
「片腕がふさがってちゃやりにくいでしょ。いいから来なさいって」
「あ、あのっ」
「ん？　なーにやすみん」
「あの……わたし、が……」
弱々しいが正当な主張に、汀は左目を眇めた。
マネージャなのだから、彼女が怪我の手当てをするのはまったく正しい。
けれど汀は彼女に鬼を視る。
鬼と鬼に魅入られた二つは惹かれあう。
人であれば、良かったのに。
人であれば、二人に何があろうがどうでも良かったのに。
「そっちの子は足くじいちゃってるみたいだから、保健室に連れてった方がいいと思うわよ」
「あ……」

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

見れば、梢子に激突した部員が他の部員に肩を借りていた。
ちょっと腕をすりむいただけの一方と、肩を借りなければ立っていることも叶わないもう一方。どちらを優先させるかは自明の理だ。
「ミギーさん、ずるいですよ」百子が小声で非難してきた。
知っているし、意識的だから、汀は傷つかない。
保健室を目指す保美に背を向ける形で、汀は梢子を連れ立って用具室へ。防具なども置いているせいで、随分と独特な匂いが充満していた。せめて、と開け放たれた窓から夏の風と音が流れ込んでいる。
ベンチに並んで座り、見つけ出した救急箱から必要なものを取り出して手当てを始める。
彼女は大人しくしていた。
「らしくないわね。あの程度をよけられないなんて、考え事でもしてた？
それとも、あたしがいるから緊張したとか？」
「違うわよ。
……あ、でも汀のせいとも言えるかも」
「どうして？」
梢子が、うっかり口を滑らせてしまった、という表情をした。目を伏せて、もごもご口をうごめかせている。何か言い訳を探しているようだが、まっすぐで嘘の苦手な彼女のこと、そうそう瞬時に出てくるわけもなく、待っていても音は発せられなかった。
ふぅむなにやら面白いことになりそうだぞと、汀はニヤニヤ笑いを隠しもせずに彼女の顔を覗き込んだ。
「オサー？　どうしたのかなー？」
「だ、だから……」
伏せられていた目がとうとう閉じられた。諦めの意思表示である。
「その……、打ち込みを受けてるうちに、胴着が乱れてきて……」
「うん？」
手当てされている腕とは逆の手で、梢子は自身の首元を押さえた。
「跡とかついていないか、気になって……」
「ええぇぇ？」
失礼な話だ。今までそんな不手際をしたことは一度もないのに。そもそも触れただけなのだから、跡などつくはずがないではないか。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

経験不足だからそんな勘違いをしたのだろうか。
まったく、それなら尚更。
怒鳴りつけたいような、抱きしめたいような、微妙な気分になる。情動。汀はどちらも選択しない。それだけの余裕はあった。
「あのねーオサ、いくらなんでもそこまで考えなしじゃないわよ？
つけたこともないし、つけるならもっと見えないところにするから」
「いや、後半はいらないわよね？」
「見えるところにつけてもいいの？　うわー、オサってば意外と大胆ー」
「つけるなって言ってるの！」
「あんまり大声出すと外に聞こえるわよ」
ぐ、と梢子の喉が詰まった。彼女の性格上、こんな会話を人に聞かれたいはずがない。
梢子が押し黙ったところで、傷口にガーゼをあてがう。包帯を巻いてメディシングテープで止めると、彼女は「大げさじゃないの？」と眉をしかめた。
「動くからこれくらいしておかないと。どうせ戻ったら続けるつもりでしょ？」
「そうだけど」
「大体、もう引退してるんだから出なくていいのに、先生に頼まれたからって律儀に来なくてもいいんじゃない？ほんと、そういうところは融通が利かないわよね。仁之介さんも呆れてたわよ」
「うるさいわね」
「石頭というか、もう金兜よね。防具つけなくても面受けられるんじゃない？」
「汀、いい加減黙らないと怒るわよ？」
いつの間にか目が据わっていた。硬質な視線だ。とても良い。
そういう目をする少女はなかなかいない。汀はその目を見るのが、その目を崩してやるのが好きだった。
「静かにしてほしいなら、オサがそうさせてみれば？」
「え……」
ここ最近、お気に入りの嫌がらせである。
「うるさいなら黙らせたらいい」心持ち低音の、低温な声。梢子の視線はたやすく崩れる。
「ここ、で？」
「イエース。ここで」
固い彼女は、遊びがないからあっさりと折れてしまう。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

潜り抜けたりすり抜けたり、そういった余裕を持たないから、いつだって手折られる。
「誰か来るかもしれないし……」
「そうしたら止めるから。大丈夫、鬼切りは気配読むの得意だし」
「鬼切りの技術をそういうことに使うのってどうなの？」
心持ち呆れる梢子だった。
「第一、神聖な道場でそういうことするのは」
その言葉に汀は笑う。失笑だった。
神聖。なるほど、道場には神棚が供えられているから、神が祀られているのだろう。
その神がなんだというのだ。
鬼をやすやすと容れて、なにもしてくれない神が、どれほど重要だと？
今目の前にいる己より、そんな神が大切だと言うの？
「黙らせないと、戻ってから、あることないことみんなに吹き込んじゃうかも」
「……脅迫のつもり？」
わずかに口調が険を帯びる。いっとき失われた視線の硬さを取り戻し、そうであればと鋭い刃の言葉を剥いた。
「まさか。お願いしてるの。判りにくかった？」
「脅迫にしか聞こえないわよ」
「そう。じゃあ」
さりげなく、膝に置かれていた右手を取って。
「……して？」
囁いた。
そんなに素直な誘い文句が来るとは思っていなかったのか、彼女の喉から奇妙な音が洩れて、空へ打ち上げられたように不安定な表情をする。
「……」
梢子はきょろりと眼を回してドアを確認すると、両手で汀の頬を包み込んだ。
清冽な仕草で引き寄せられる。汀は口元を緩めた。きっと己の表情は幸福をしている。
唇が唇に触れて、湿度を持った温みが割って入ってくる。
汀の饒舌を封じる錠舌がおずおずと絡む。いやに性的で、嫌になるほど清潔な行為だった。
絡み合う体温はすぐに離れた。本能はまだ理性を凌駕しない。
かすかに潤んだ視線。あのまっすぐで硬質な目がそんな風に変化する、それが愉快で汀は小さく笑う。
「――――静かに」

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

告げる声はひそやか。頬を包み込んでいる両手が熱い。
夏だな、と思う。
見上げた空はどこまでも青く一点の曇りもない。
わだかまりがないから狂おしいほどに青ばかりで、押し寄せる青が我先にと争う。
だから、訪れるのは静。
そういう夏だった。

なし崩し的に小休止となっている道場は、とにかく暑い。動いていればまだ気も紛れていたが、座り込むともう駄目だった。だくだくと流れる汗がわずらわしくて百子は耐えられなくなった。
「秋田百子、ちょっと風に当たってきまーす」
勢い良く挙手して宣言。指導者のいない場は多少だれていて咎める者はいない。
百子は防具を外すと一目散に外を目指した。釣られた何人かが重い足取りでそれに続く。
目指すは道場の裏手である。他の面々は飲み物でもとりに行ったのか、後ろについてくる気配はなかった。

道場が作り出している日陰に逃げ込んだ百子は足を緩めて息をついた。
「うう、暑い……日の下に者がいれば暑いわけですよ。だからあたしは日の下から逃れたわけです。ありがとう日陰さん」
日陰に入り、風を受けたおかげで、少しだけ体感温度が下がっている。胴着を着崩すと隙間に風が入って心地よかった。
「にしてもミギーさん、あれはひどいです……」
だらだらと歩きながらひとりごちる。
保美をからかうのはいつものことだが、それにしたってあれはやりすぎだ。
少し不思議な感じさえした。あれは……そう、彼女がギリギリ保っていたボーダラインを越えていた気がする。
あんな、本当の意味で保美を傷つけるような目つきをしたことはなかったのに。
あの視線は良くない。あれが意味するものは排他だ。
己の分をわきまえている彼女らしくもない。
いつも輪の外にいて、たまにちょっかいをかけてくるだけの存在であるはずの彼女が、彼女を取り巻くものが、変わっている。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

「ざわっち気にしてるだろうなあ……」
はあ、と溜め息。夏の喧騒は遠い。自分の呼気がやけに大きく聞こえて、百子はそれを気持ちの重さが出たのだと勘違いする。
いかんいかん、自分まで沈んでは、保美に余計な心配をかけてしまう。握りこぶしを作って気合を入れると、それを振り上げるべく力を込めた。
けれど、それが上がることはなかった。
日陰を歩き続けて、いつの間にか道場を半周してしまっていたらしい。
百子のすぐ横は窓だった。窓の位置は高く、上背がないから目の高さが窓の下枠をやっと超える程度であるが、それでも顔をそっちに向けてしまえば、中を覗くことは可能。
可能でも、見るつもりはなかったし、見たくもなかった。
そこに音はなかったし、気配もなかった。
ただ、ただ……世界が、あった。
排他的な、他者が不用意に触れたら身を切られそうな、絶対的に交わりを持たない唯一で絶無の世界。
抜き身で孤独な、かたちのない、色しかない世界。
その世界は百子にとって絶望だった。
絶望過ぎて、美しいとすら思ってしまった。
四方を紺碧に囲まれたかのような、閉じた完璧。
百子は足音を忍ばせて後ろへ下がる。
泣きそうだった。
大切な人が排除されている現実が悲しくて、一瞬でも彼女を裏切ってしまった自分に腹が立って、泣きたかった。

そのまま道場へ戻ると、梢子たちも保美も帰っていた。
「あ、百ちゃんおかえり」保美が朗らかな笑みで迎えてくれる。「ただいまざわっちー」百子も朗らかを装って応える。
「と、戻ったばかりですみませんが、ミギーさんちょっといいですか」
「なになに？　手合わせでもしてほしいの？」
「いえ、ちょっとお話が」
汀の表情がごく微かに変化した。きっと気づいたのは百子だけだろう。
「じゃ、二人で内緒話をしましょうか。オサ、百ちー借りるわよ」
「また勝手に……。まったく、早く戻ってきなさいよ」

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

外界へ抜けた先を進み、ひとけのない場所で止まる。汀はつかみ所のない笑顔だった。閉じた、取っ掛かりのない球形の笑顔を百子は直線的に見据える。
「百ちー、さっき見てたでしょ」
「見てたんじゃなくて、『見えた』んです。あたしだって見なくていいなら見ずに済ませておきたかったですよぅ」
「怒ってる？」
「……それなりに」
中途半端な返答が面白かったのか、汀が喉を鳴らした。
百子が唇を噛む。腑の底から沸き起こる負の感情をそうして押し殺した。感情の種類は、怒りによく似た悔しさだった。
「なんで、オサ先輩なんですか。ミギーさん美人だし性格も……まあいいとは言えませんけど、悪くもないから他にいくらでもいるじゃないですか」
「素直って時に残酷よね」
正鵠を射る評価だ、とそれだけは褒める汀だが、心中は複雑そうだった。
彼女は悪びれもせず、かといって開き直っているわけでもなく、まったくもって平常で、百子は自分こそが間違っているのではないかと不安になる。
彼女の……彼女たちの世界はあまりにも完璧だったから。
汀はつるりとした笑みのままで腕組みをする。心理学的には防御姿勢であるが、彼女が放つ雰囲気からすれば、むしろ即座に攻撃できないよう、両腕を封じて相手を安心させるためにそうしたようだった。
「どっちがいい？」
「なにがです？」
「あたしがオサを選んだっていうのと、オサがあたしを選んだっていうの」
尋ねる彼女の笑みは悪戯で、ああやはりいつも通りで正しいと百子は思う。
いつだって彼女は意地悪なのだ。
「どっちも嫌ですけど……あたしとしては、ミギーさんが選んでほしいです」
「残念はずれー」
「ええ!?　じゃあオサ先輩なんですか！　そんな、だってミギーさん一年も音信不通だったくせに！　ざわっちなんてそれはそれは毎日かいがいしくオサ先輩のお世話をですねえ！」
「あ、それもはずれ」
「ほえ？」

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

じゃあさっきのあれはなんだ、と詰め寄る。
あの世界は、確かに少し奇妙だったが『そう』であるのだと百子は判じた。
誰かが誰かを選んで作られる世界だ。他の誰も入れない世界だ。通常より攻撃的で排他的に見えた。強い世界だった。そして鋭い。
だからこそ百子は危機感を覚える。そんなところに保美を送るわけにはいかない。あのか弱く切ない少女は、世界の強さに太刀打ちできない。彼女は刃を持たない。
汀のまぶたが軽く下りて、それは眠そうな猫に似ていた。
「別に選んでないし束縛もしてない。そうね、わりと即物的なのよ。綺麗じゃないから執着しないで済んでるのかもね。
だから別に、オサがやすみんとそういうことになっても構わないし」
「なら、どうしてさっき、ざわっちの邪魔したんですか」
「時期じゃないって感じかしらね」
一から百まで意味不明だ。今が時期でないならいつが旬なのだ。もう彼女は、一年以上を儚く無為に過ごしてしまっているというのに。
そう問うと、彼女は少し寂しげにも見える表情で答えた。
「あきがきたら、かな」
「それ結局、自分がいる間はオサ先輩に手を出させないってことじゃないですか。ミギーさん、夏休み中はこっちにいるつもりなんですよね？」
「ん、そうね」
日差しが眩しかったのか、汀が少しだけ立ち位置を移動して、道場の壁に背をつけた。
執着がないのだと彼女は言う。それはどういうことなのだろう。
己は保美に執着している。ただそのベクトルを変えただけだ。欲するのではなく与えようと決めた。そうすれば、彼女はきっと幸福だ。彼女の幸福が己の第一目的で、それ以外は後回しでも諦めてもいい。
百子は意識的に考えたことなどなかったが、それはもう恋ではなく愛と言えた。
こいと呼ぶ想いではなく、あいと応える想いだった。
正解で解放された世界に百子は存在する。
だからこそ、不正解な封世界に、百子は憧れる。
すべてが自分と反対の、裏闇にある結論を羨み、同時に恨む。
「あたしは……あたしは、ざわっちが一番大事です」

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

己よりも、誰よりも。
「知ってる」汀が簡素な返答をする。
自分はそうでないと言外に言う。
「だから、やっぱりミギーさんのことは認められません」
「ま、百ちーはそうでしょうね」
「絶対、ミギーさんからオサ先輩を奪ってみせますから！」
ビシッと汀を指差して宣戦布告。礼に反する行為だが、頭に血が上っている百子はそれに思い至らないし、汀もあえては指摘しない。それよりも届いた言葉がおかしかったようでくつくつと肩を震わせている。
「それじゃ百ちーがオサに惚れてるみたいよ？」
「いいんです！　あたしとざわっちは一心同体ですから！」
自分でもわりと訳が判らなくなっていたが、勢いだけで胸を張った。
「ま、せいぜい頑張って」「うわちょう上から目線！」
百子はぷんすか怒って両腕を振り上げる。先ほど上げられなかった分が溜まっていたからずいぶん激しかった。
「二人とも、なにを騒いでいるの」
いつまで経っても戻ってこない二人を訝ったのだろうか、梢子が顔を出してきた。

「ああ、オサ」汀が組んだままだった腕を解いた。自然に下りた両腕は長さが際立つ。なんとなく少女的に悔しくなる百子である。
「百ちーがやすみんと身も心もひとつになったそうよ」
「え？　お、おめでとう……？」
「なっ、違います！　四字熟語を字面だけ読まないでくださいよ！　オサ先輩も素直に受け取らないで！」
とんでもない勘違いをされそうな事態に陥り、百子は大慌てで否定した。
冗談ではない、それを望んでいないのかと聞かれれば首を横に振りきることはできないが、だからといって表に出して良い願いではないのだ。もし万が一、何かがまかり間違って剣道部員や寮生の耳に入りでもしたら、確実に目も当てられない未来が待っている。
当の保美は十中八九、少し困ったように微笑んで、それで終了だろう。それはそれでちょっと悲しいけれど。
喉を震わせる汀をねめつけると、彼女はさらに笑みを深くした。軽薄なのに深遠な笑みだ。薄ら寒ささえ感じさせる。
「っていうのはミギーさんの冗談で、ほんとは百ちーに釘刺されただけ」

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.

「釘？」
首を傾げる梢子の腰を、しなやかな腕がつかまえる。
「オサにあんまりこういうことするなって」
百子の口から地鳴りのような呻き声が出た。
抱き寄せるだけならまだしも、今なにか、赤いものが梢子の首筋に……。
「わーわー！　みみみミギーさんなにをー!?」
「なにって、言っていいの？」
「黙りなさい汀！」
真っ赤になった梢子に怒鳴りつけられても汀はどこ吹く風。
慌てている二人を置いてきぼりにして、閉じた球体は「夏よね」と日差しみたいに笑った。

Copyright (C) 2008 Kurotake Zippo. All Rights Reserved.